

# 名戸ヶ谷ビオトープだより

第33号

2008年10月1日

名戸ヶ谷ビオトープを育てる会発行

<http://nadogaya-biotope.org/index.html>

発行責任者： 篠崎 将 Tel/Fax: 04-7173-6353

## 今年は豊作 稲穂が重いでーす



9月5日、天気にも恵まれて待望の稲刈りです。今年は稲穂が重いためと集中豪雨のせいか、稲が少し倒れてしまいました。穂が水に漬かったところは、もう芽が出ています。畔の周りを全員で事前に刈り込み、足元を確保しました。10時30分。諸注意のあと、5年生48人でいざ稲刈り開始です。

相変わらず田圃はぬかるんでいますし、稲が倒れていることもあって、作業はなかなか捗りません。刈り取られて木道の上に置かれた稲もばらばらの状態です。指導に当たる先生の声もつい大きくなってしまいます。

おっと、青大将も稲の間から出てきました。「しっかりやりなさいよ」と言っているようでした。

昼近くになってしまい、ビオトープ会員による緊急応援で稲刈りは無事終了。新しく出来た足洗い場で泥んこを流して作業は終了です。一方、6年生66人は5年生が刈った稲を束ね、2台のリヤカーと数台の一輪車に乗せて学校までの間を往復して運び、プールのフェンスに掛ける作業をしました。お疲れさまでした。(小笠原 智)

### ひとくちインタビュー

- 泥だらけになったけどとても楽しかった (5年男子)
- 田んぼはぐちゃぐちゃだったけど楽しかった (5年女子)
- 稲ってこんなにも育つのか、と驚いた(5年女子)
- 今年は収穫量が超多い。(6年男子)
- 重くて運ぶのが大変。(6年男子) ○きつい!(6年男子)
- 稲を運ぶのがこんなにつらいとは思わなかった(6年男子)
- 稲に泥がついて大変そうだった(5年担任教員)



- 生まれて初めて稲刈りをやりました。とてもよい思い出になりました。(5年 鈴木 翔太)
- 「うわっ!どろだらけ!」。でも、こうやって自分たちで稲刈りをしたお米を「ふれあいの集い」でみんなに食べてもらいたいです。(5年 根岸 優奈)

## 洗い場とトイレが実現



平成20年度の千葉県生物多様性体験学習推進事業の補助金により手足や農具の洗い場とトイレを設置しました。この設備は名戸ヶ谷小学校校長、同PTA会長、柏市環境保全課長、名戸ヶ谷町会長、亀甲台町会長、ビオトープを育てる会が協議して設置を決めたものです。

9月5日の稲刈りでは、早速児童が利用いたしました。水は井戸を掘り汲み上げていますので、

大切に使いたいものです。(篠崎 将)

# ずっしりと重い稲の実り

## 不耕起田圃の稲刈り

今年も実りの季節となり、恒例の稲刈りです。昨年よりうまい米を目指し多種の肥料を散布し養分を蓄えた稲は「美味しいお米」になっているかな？

前日の9月5日に名戸ヶ谷小の稲作水田の稲刈りを終えてパイプ延長工事に取り組む中で不耕起田圃の倒伏と発芽の兆候に気付きました。その結果、早めの刈り取りをしようとの声が上がリ、翌5日（土曜日）朝、5番田圃から刈り取りに着手することになりました。



昼食を挟み、午後からの参加者を含めてこの日は総勢 13 名で3枚の刈り取りを終了。一同やる気満々で、急遽翌日の7日（日）も作業をすることになり、残り3枚の刈り取りを午後3時に終えました。お疲れさまでした。

稲の重み、等が原因と思われる。(窪田孝志)

事件です。9月8日（月）に棹架けパイプが約 16m倒壊しました。この日ビオトープに立ち寄った田中さんが発見。翌火曜日に復旧工事を行いました。木道側の支柱不足、豊作による予想外な

## 雀ネット張り

炎天下の8月9日（土）、在来水田と不耕起水田の両方にネットを張りました。原稿書きは苦手という田中さんに作業の印象を聞きました。

「暑かった！ネット張りは3年目？少し傷んできたかな。作業はみんな手慣れてきて、早いものですね。」(広報)



## 架設パイプ設置



8月30日（土）。稲刈りに備えた田圃の雀ネットはずし作業を終えた後、山谷さんの采配下で不耕起田圃の稲刈りに備えたパイプ架設作業をしました。曲芸師のように高い架設パイプの上に身を置きながら力を入れてボルトを締めるのは山谷さんの独断場。奴隷たちは黙々と物置小屋から木道脇までパイプを運びました。

汗だくで奮闘中の山谷さんに聞きました。

「感想？なんもないよ。作業を手伝う人間が少なすぎるね。」

(広報)

# 足踏み脱穀に初挑戦！

## もち米の部一名戸ヶ谷小学校にて

9月25日(金)、朝9時頃から校庭に集合し、脱穀機・唐箕などを配置して準備を整える。当日の主役である5年生の児童は10時半にならないと登場しないので、我々だけで作業を始める。今年の稲束は草丈も長く、稲穂も充実し、上々の出来と思われる。

5年生の児童たちは、一人一束ずつ足踏みの脱穀機を経験し、唐箕も交代で操作したり、それぞれが生まれて初めての脱穀作業に挑戦していた。5月の田植えに始まり、稲刈り・脱穀と、恐らく殆どの子供たちにとっては、将来も経験することのないかもしれない米作りの作業だったと思うが、それだけに「何か」を感じ取ってくれたら嬉しいのだが。昼食においしい学校給食を頂き、2時頃、午前中に終わらなかった作業を完了した。(村川五郎)



## 脱穀体験ひとくちコメント

- 僕は脱穀にチャレンジしました。でもなかなかうまくいきませんでした。ほとんど「育てる会」の方にやっていただきました。(和田峻也)
- 足で踏む脱穀機で4回ぐらい挑戦しました。初めてやりましたが、またやりたいと思っています。(千葉裕)

## 不耕起米の部ービオトープにて

「一気にばあっとやると持っていられるから、最初は先の方だけ。次に片方の手は固定したままひっくり返して、次に広げて残ったのをやる・・・」。私の脱穀作業は始まりました。数年前、別のところで脱穀作業は経験していたものの、しっかりと腰を据えて脱穀するのは初めて。「MADE IN NIPPON」というプレートがついた年代ものの脱穀機を使っての脱穀作業や、更に年代を感じさせる唐箕にかける前の選別作業。選別作業は、正直なところ気が遠くなる思いでしたが、こういう作業を経験することにより、作物を育てることの大変さを実感出来る気がします。一日も早く戦力になれるよう頑張りますので、ご指導よろしく願います。(加藤貴久)



「一気にばあっとやると持っていられるから、最初は先の方だけ。次に片方の手は固定したままひっくり返して、次に広げて残ったのをやる・・・」。私の脱穀作業は始まりました。数年前、別のところで脱穀作業は経験していたものの、しっかりと腰を据えて脱穀するのは初めて。「MADE IN NIPPON」というプレートがついた年代ものの脱穀機を使っての脱穀作業や、更に年代を感じさせる唐箕にかける前の選別作業。選別作業は、正直なところ気が遠くなる思いでしたが、こういう作業を経験することにより、作物を育てることの大変さを実感出来る気がします。一日も早く戦力になれるよう頑張りますので、ご指導よろしく願います。(加藤貴久)

## 稲刈りに汗を流した夫からバトンを受けて

機械での脱穀を目にしたことはありましたが、手作業の脱穀は初めての体験です。おまけに農作業の経験も殆どない私ですが、「猫の手よりもまし？」と皆さんの教えを受けながらの作業です。戸惑いながらも、段々と要領を覚えていきました。レトロな香りの漂う脱穀機。いったい何時この世に誕生したのでしょうか。その頃の名戸ヶ谷はいったいどんな様子だったのかしら。柏の町並みは・・・そんな会話を交わしながら、貴重なひと時を過ごすことができました。(佐藤郁子)

## ビオトープを飾る風物詩・案山子



夏休みの暑い中、大谷先生(名戸小)が工夫して案山子2体を作ってくれました。これで雀が来ないといのですが・・・ヘルメットを被った案山子は小笠原さん(ビオトープ)の作品です。



# ビオトープの花



晩秋のビオトープを彩る名花、ミゾソバとカントウヨメナを紹介します。

10月になると、ビオトープはミゾソバ(写真左)に覆われます。ミゾソバは水路の脇や水田・湿地の中に群がって咲きます。ミゾソバの名前は、溝(湿地)に咲く蕎麦(ソバに似たタデ科の花)という意味です。群れて咲く姿も美しいのですが、花を手にとって近くに見てください。一つ一つの小さな花はとても愛らしく、見ていて美しい気分になります。



ミゾソバが華やぐ頃、カントウヨメナ(写真右)

がひっそりと水田の畔などに咲きます。カントウヨメナは野菊の一つです。ノコンギクやユウガギクなどの他の野菊と違ってやや湿り気のある場所を好んで生え、柏では水田の畦を飾る野菊となっています。ほんのりと赤紫に染まった花弁が落ち着いた秋の風情を漂わせています。優雅な姿をカメラに収めてください。(佐々木 光正)

ビオトープを育てる会収穫祭：11月1日(土) 名戸ヶ谷ビオトープ  
ビオトープ展：11月20日(木)～11月28日(金) 柏市役所第2庁舎1Fロビー  
名戸ヶ谷ふれあいの集い：11月15日(土) 名戸ヶ谷小グランド

## ビオトープと私 第2回

今年で6回目の米作りは、幹事・諸先輩のご指導よろしく、早目の草取り、肥料散布、ザリガニ対策を行ったことや13年振りの猛暑も幸いしてか、稲は元気よく育ち、稲刈りにも手応えを感じました。米作りをはじめ、ビオトープ管理に関してきたおかげで、沢山の人や見過ごしてきた生き物・植物達と出会え、多くのことを知ることが出来ました。

子供の頃の教科書に載っていた弥生時代の登呂遺跡の水田址は、現代の田に似た広く区画されたものでしたが、発掘技術が進んだ今では、同時代の水田は20平米位であったろうといわれています。農具は、クワ、スキでいずれも木製ですが、形は現在使っているものとほぼ同じです。不耕起の一番小さな6番田(33.3平米)のイメージでしょうか。古代の農具、人力等で田を管理し稲を育てることを思うと合点がいきます。周辺に宮根遺跡があり、香取の海(手賀沼)を望むこの低地で、1,000年以上前の昔から稲が栽培されていたのではとの思いを馳せるのも楽しいものです。

北海道の水田地帯に生まれ育ちながら、手伝いをさっぱりしなかった三男坊が、最初に収穫した不耕起米を1kg 田舎に送ってあげました。お袋は「ケン(私のこと)から米を送ってもらうとは思ってもみなかった」と言っていました。故郷のDNAを微かに引き継いでいるのを感じ喜んでいるのでは、と今年も「ホテルの里の不耕起米を食べたら長生きするよ」と能書き付けて送ってやろうと思います。(上村憲治)

### 編集後記

ビオトープに洗い場・簡易トイレが設置され、稲刈りを終えた児童たちが早速泥んこ足にポンプの水をかけていました。田んぼには昔懐かしい案山子も三体登場。雀に睨みを効かせてくれました。今年は早めの雑草取りに加えて猛暑も幸いし、稲刈り・脱穀作業を通して誰もが感じた稲の重みは正に実りの秋を思わせるものでした。「ふれあいの集い」と収穫祭を大いに楽しみましょう。(広報担当 春山)